

凱旋祭

泉鏡花

青空文庫

紫の幕、紅の旗、空の色の青く晴れたる、草木の色の緑なる、
 唯ただうつくしきものの弥いやが上に重なり合ひ、打うちこん混じて、譬たとへば大
 なる幻うつしえ燈の花輪車かりんしゃの輪を造りて、烈はげしく舞出で、舞込むが見
 え候のみ。何をか緒いとぐちとして順序よく申上げ候べき。全市街はその
 日朝まだきより、七色を以て彩られ候と申すより他はこれなく候。
 紀元千八百九十五年一月一日の凱旋がいせんまつり祭は、小生が覚えたる
 観世物みせものの中に最も偉おおいなるものに候ひき。

知事の君をはじめとして、県下に有数なる頭官、文官武官の数

を尽し、有志の紳商、在野の紳士など、尽く銀山閣といふ俱樂部組織の館に會して、凡そ半月あまり趣向を凝されたるものに候よし。

先づ巽公園内にござ候記念碑の銅像を以て祭の中心といたし、ここを式場にあて候。

この銅像は丈一丈六尺と申すことにて、台石は二間に余り候はむ、兀如として喬木の梢に立ちをり候。右手に提げたる百鍊鉄の劍は霜を浴び、月に映じて、年紀古れども鏘色見え、仰ぐに日の光も寒く輝き候。

銅像の頭より八方に綱を曳きて、数千の鬼灯提灯を繋ぎ懸け候が、これをこそ趣向と申せ。一ツ一ツ皆真蒼に彩り候。提

灯の表には、眉を描き、鼻を描き、眼まなこを描き、口を描きて、人の顔になぞらへ候。

さて目も、口も、鼻も、眉も、一いつよう様普通のものにてはこれなく、いづれも、ゆがみ、ひそみ、まがり、うねりなどつかまつ仕り、なかには念ねんいり入にて、酔狂にも、真赤な舌を吐はかせたるが見え候。皆切取つたる敵兵の首の形にて候よし。さればその色の蒼きは死相をあらはしたるものに候はむか。下の台は、切口なればとて赤く塗り候。上の台は、尋常に黒くいたし、辮べんぱつ髪とか申すことにて、一々わらびなわ蕨繩にてぶらぶらと釣りさげ候。一ツは仰向き、一ツは俯うつむ向き、横になるもあれば、縦になりたるもありて、風の吹くたびに動き候よ。

二

もよおし 催のかかることは、ただ九きゆう牛ぎゆうの一いち毛もうに過ぎず候。凱旋がいせん
門もんは申すまでもなく、一いっ廓かく数百金を以て建られ候。あたかも
記念碑の正面にむかひあひたるが見え候。またその傍かたわらに、これこ
そ見物みものに候へ。ここに三み抱かかえに余る山桜の遠山桜とて有名なるが
ござ候。その梢より根に至るまで、枝も、葉も、幹も、すべて青
き色の毛布にて蔽おほひ包みて、見上ぐるばかり巨大なる象の形こしらに拵
へ候。

毛布はすべて旅団の兵員が、遠征の際に用ゐたるをつかひ候よ

し。その数八千七百枚と承り候。長蛇ちようだの如き巨象の鼻は、西の方
 方にさしたる枝なりにふたうね一一蜿蜒ふたうねりて唧筒ポンプを見るやう、空高き梢
 より樹下を流るる小川に臨みて、いま水を吸ふ処に候。脚あしは太く、
 折から一員の騎兵の通り合せ候が、兜かぶと形がたの軍帽いただきの頂より、爪
 の裏まで、全体唯その前脚まえあしの後うしろにかくれて、纔わずかに駒こまの尾のさき
 のみ、此方こなたより見え申し候。かばかりなる巨象の横腹をば、真まっし
 四角かくに切り開きて、板を渡し、ここのみ赤き氈せんを敷詰めて、踊
 子が舞の舞台にいたし候。葉桜の深ふかみどり翠あざしたたるばかりの頃に
 候へば、舞台の上下にいや繁しげりに繁りたる桜の葉の洩もれ出いで候て、
 舞台は薄暗く、緋ひの毛氈けしの色も黒ずみて、ものしめやかなるな
 かに、隣国へだを隔てたる連山いただきの巔遠く二ツばかり眉を描きて見渡さ

れ候。遠山桜あるあたりは、公園の中うちにても、眺望ちようぼうの勝しょうけ
景い、第一と呼ばれたる処ところに候へば、式かたの如き巨大なる怪獣の腹の
下、脚あしの四ツよある間まを透すかして、城やぐらの櫓見え、森も見え、橋も見え、
日傘ひがささして橋の上渡り来るうつくしき女の藤色の衣きぬの色、あほか
も藤の花ひとひら一片、一片の藤の花、いといと小さく、ちらちら眺め
られ候ひき。

こは月のはじめより造りかけて、凱旋祭の前一日の昼すぎまで
に出来上り候を、一度見たる時のことこれありに有あり之候。

夜に入ればこの巨象の両個まなこの眼まなこに電燈ひともを灯し候。折ひらから曇どん天
に候ひし。一体いったいに樹立こたち深く、柳松いしげなど生お茂りて、くらきなかに、
その蒼白なる光もらを洩し、巨象の形は小山の如く、喬木の梢こを籠め

て、雲低き天に接し、朦朧もうろうとして、公園の一方にあらはれ候時
 こそ怪獣は物凄ものすさまじきその本ほん色しよくを顯あらわし、雄大なる趣を備へ
 てわれわれの眼には映じたれ。白昼はヤハリ唯毛布を以て包みな
 したる山桜の妖精に他ならず候ひし。雲はいよいよ重く、夜はま
 すます闇くらくなり候まま、炬きよの如き一いっ双その眼、暗夜に水銀の光を
 放ちて、この北かたの方かた三十間、小川ながれの流一そたび灌そぎて、池となり候
 池のなかばに、五条の噴水、青竜の口よりほとばしり、なかぞら
 のやみをこぼれて篠しのつくばかり降りかかる吹上げの水を照し、相あ
 対たいして、またさきに申上候銅像めての右ひ手に提ひげたる百鍊鉄なの劍なに
 反映して、次第に黒くなりまさる漆うるしの如き公園この樹立だちの間なかに言ふ
 べからざる森しんげん嚴げんの趣を呈し候、いまにも雨降り候やうなれば、

人さききに立帰り申候。

三

あくれば凱旋祭の当日、人々が案じに案じたる天候は意外にも
おだやかに、東しのめ雲より密雲破れて日光を洩もらし候が、午前に到り
て晴れ、昼少しすぐるより天あっぱれ晴なる快晴となり澄すまし候。

さればこそ前ぜん申上げ候通り、ただうつくしく賑にぎやかに候ひし、全
市の光景、何より申上げ候はむ。ここに繰返してまた単いっぶくに一幅
わが県全市の図は、七色を以てなとりて彩られ候やうなるおもひ
の、筆執とればこの紙面しめんにも浮びてありありと見え候。いかに貴下、

さやうに候はずや。黄なる、紫なる、くれない紅なる、いろいろの旗天を
おお蔽ひて大鳥の群れたる如き、旗の透間すきまの空青き、樹々の葉みどりの翠な
 る、路を行く人の髪かざしの黒き、簪てがらの白き、手絡ひの緋なる、帯の錦、
そで袖あやの綾、薔薇しょうびの香か、伽羅きやらの薰かおりの薰くんずるなかに、この身体からだ一ツは
 さまれて、歩ある行くにあらず立たちどま停るといふにもあらで、押され押
 され市まちなか中をいきつくたびに一歩づつ式場近く進み候。横の町も、
 縦の町も、角も、辻も、山下も、坂の上も、隣こうじの小路もただ人の
 けはひの轟ごうごう々とばかり遠波の寄するかと、ひツそりしたるなか
 に、あるひは高く、あるひは低く、遠くなり、近くなりて、耳底じてい
 に響き候のみ。裾すその埃ほこり、歩あゆみの砂に、両側の二階家の欄干らんかんに、果
 しなくひろげかけたる紅の毛氈もうせんも白くなりて、仰げば打重うちかさな

る見物の男女なんによが顔も臃おぼろげなる、中空にはむらむらと何にか候らむ、陽炎かげろうの如きもの立ち迷ひ候。

万丈の塵ちりの中に人の家の屋根より高き処々、中空に斑々はんはんとし目覚めざましき牡丹ぼたんの花ひるがえの翻りて見え候。こは大なる母衣ほろの上に書いたるにて、片端には彫刻したる獅子ししの頭かしらを縫ぬひつけ、片端には糸つかを束つかねてふつさりと揃へたるを結び着け候。この尾と、その頭と、及び件くだんの牡丹の花描いたる母衣とを以て一頭の獅子にあひなり候。胴中には青竹を破わりて曲げて環にしたるを幾いくところ処ところにか入れて、竹の両はしには屈くつきよう竟わかもの壮わかも佼あてあて、支へて、膨ふくらかに幌ほろをあげをり候。頭かしらに一人の手して、力たく逞たくましきが猪首いぐびにかかげ持ちて、朱盆の如き口を張り、またふさぎなどして威を示し候都度つど、仕掛

を以てカツカツと金色こんじきの牙きばの鳴るが聞え候。尾のつけもとは、
 ここにも竹の棹さおつけて支へながら、人の軒より高く突上げ、鷹おうよ
 揚うに右左に振り動かし申候。何貫目やらむ尾にせる糸をば、真
 紅の色に染そめたれば、紅の細き滝支ふる雲なき中空より逆さかさにおち
 て風に揺ゆらるる趣見おもむきえ、要するに空間に描きたる獸王の、花々し
 き牡丹の花はな衣着はなぎぬけながら躍おどり狂ふにことならず、目覚しき獅子
 の皮の、かかる牡丹の母衣の中に、三味さみ、胡弓こきゆう、笛、太鼓つづみ、鼓
 を備へて、節をかしく、かつ行き、かつ鳴して一ゆるぎしては式
 場さして近づき候。母衣の裾すそよりうつくしき衣きぬの裾、ちひさき女
 の足などこぼれ出でて見え候は、歌うた姫ひめの上手じょうずをばつどへ入れ
 て、この樂器つかさどを司つかさどらせたるものに候へばなり。

おなじ仕組の同じ獅子の、唯ただひと一つには留おもだまらで、主立おもだつたる町々より一つづつ、すべて十五、六頭ねり出いだし候が、群集ぐんじゆのなかを処々横断し、点綴てんてつして、白き地に牡丹の花、人を蔽おほひて見え候。

四

群集ばらばらと一いっせい斉せいに左右に分れ候。

不意なれば踰よろ踰よろめきながら、おされて、人の軒に仰ぎ依りつつ、何事ぞと存じ候に、黒き、長き物ずると来て、町の中央なかを一文字に貫きながら矢の如く駈かけ抜け候。

これをば心付き候時は、ハヤその物体の頭かしらは二、三十間けんわが眼
 の前を走り去り候て、いまはその胴どうなか中あたり連りしきに進行いたし
 をり候が、あたかも凧たこの糸を繰出す如く、走馬燈籠まわりどうろうの間断なき
 やうにわか俄に果つべくも見え申さず。唯人ただの頭も、顔も、黒く塗りて、
 肩より胸、背、下腹のあたりまで、墨もていやが上に濃く塗りこ
 くり、赤禪襠あかふんどし着けたる臀いしき、脛はぎ、足かかと、踵かかと、これをば朱を以て真赤
 に色染めたるおなじ扮装いでたちの壮佼わかものたち、幾百人か。一人行く前
 の人の後あとへ後へと繋ぎつなあひ候が、繰出す如くずんずんと行き候。
 およそ半時間は連続いたし候ひしならむ、やがて最後の一人の、
 身体からだ黒く足赤きが眼前をよぎり候あと、またひらひらと群集左右
 より寄せ合うて、両側に別れたる路を塞ぎふさ候時、その過行きすぎゆし方かた

を打眺め候へば、彼の怪物の全体は、遥なる向の坂をいま蜿り
うちなが
 蜿りのぼり候首尾の全きを、いかにも蜈蚣と見受候。あれはと見
しゆび まった
 る間に百尺波状の黒線の左右より、二条の砂煙真白にはツ
ひやくせき
 と立つたれば、その尾のあたりは埃にかくれて、躍然として擡
ほこり
 げたるその白の如き頭のみ坂の上り尽くる処雲の如き大銀杏の
うす
 梢とならびて、見るがうちに、またただ七色の道路のみ、獅子の
こずえ
 背のみ眺められて、蜈蚣は眼界を去り候。疾く既に式場に着し候
なが
 ひけむ、風聞によれば、市内各処における労働者、たとへばぼて
うわさ
 ぶり、車夫、日傭取などいふものの総人数をあげたる、意匠の
ひようとり
 俄に候とよ。
パフナリー

彼の巨象と、幾頭の獅子と、この蜈蚣と、この群集とが遂に皆

式場に会したることをおん含ふくみの上、静にお考へあひなり候はば、
いかなる御感おんかんじか御胸おんむねに浮うび候や。

五

別に凱旋門がいせんもんと、生首提灯なまくびじようちんと小生は申し候。人の目鼻書き
て、青く塗りて、血の色染めて、黒き蕨わらびなわ繩なわ着けたる提灯と、
竜の口なる五条の噴水と、銅像と、この他に今も眼に染しみ、脳に
印して覚え候は、式場なる公園の片隅に、人を避けて悄しょうぜん然ぜんと
立ちて、淋さびしげにあたりを見まはしをられ候、一個年若ひとりき佳人に
ござ候。何といふいはれもあらで、薄紫のかはりたる、藤色の衣きぬ

着けられ候ひき。

このたび戦死したる少尉B氏の令閨れいけいに候。また小生知人にござ候。

あらゆる人の嬉しげに、楽しげに、をかしげに顔色の見え候に、小生はさて置きて夫人のみあはれにしお悄れて見え候は、人いきりにやのぼせたまひしと案じられ、近う寄り声をかけて、もの問はむと存じ候折から、おツといふ声、人なだれを打つて立騒さわぎ、悲鳴をあげて逃げ惑ふ女たちは、水車の齒にかかりて撥はね飛ばされ候やう、倒れては遁にげ、転びては遁にげ、うづまいて来る大蜈蚣むかでのぐるぐると巻き込む環のなかをこぼれ出で候が、令閨れいけいとおよび五三人はその中心になりて、十重とえはたえ二十重とえはたえに巻きこまれ、遁のがるる隙ひま

なく伏ふしまろび候ひし。警官駈かけつけて後のち、他は皆無事に起上り候に、うつくしき人のみは、そのまま裳もすそをまげて、起たず横はり候。塵ちりほこり埃ちりほこりのそのつややかなる黒髪を汚けがす間もなく、衣紋えもんの乱るるまもなく、かうはなりはてられ候ひき。

むかでは、これがために寸断され、此処ここに六尺、彼処かしこに二尺、三尺、五尺、七尺、一尺、五寸になり、一分になり、寸すた々ずたに切り刻まれ候が、身体からだの黒き、足の赤き、切れめ切れめに酒気を帯びて、一つづつうごめくを見申し候。

日暮れて式場なるは申すまでもなく、十万の家軒たけごとに、おなじ生首提灯の、しかも丈たけ三尺ばかりなるを揃いっせいうて一ひと斉ともに灯し候へば、市内の隈くま々ま塵塚ちりづかの片隅までも、真ま蒼つさき昼とあひなり

候。白く染め抜いたる、目、口、鼻など、大路小路の地つちの上に影
 を宿して、青き灯ひのなかにたとへば蝶の舞ふ如く蠟燭ろうそくのまたた
 くにつれて、ふはふはとその幻まぼろしの浮いてあるき候ひし。ひとり、
 唯、単に、一字いちじうの門のみ、生首ひとこに灯ひきで、淋さびしく暗くらかりしを、怪
 しといふ者候ひしが、さる人は皆人の心も、ことのやうをも知ら
 ざるにて候。その夜更ふけて後、俄然がぜんとして暴風起り、須臾しゆゆのまに
 大方の提灯を吹き飛ばし、残らず灯ひきえて真闇まつくらになり申し候。
やみよ闇夜のなかに、唯一すさツ凄まじき音聞え候は、大木の吹折られたる
 に候よし。さることのくはしくは申上げず候。唯今風の音聞え候。
 何につけてもおおなつかしく候。

月 日

ぢい様

青空文庫情報

底本：「外科室・海城発電 他五篇」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年9月17日第1刷発行

2000（平成12）年9月5日第18刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1942（昭和17）年12月25日第1刷発行

初出：「新小説」第二年第六卷

1897（明治30）年5月

※「読みにくい語、読み誤りやすい語には現代仮名づかいで振り仮名を付す。」との底本の編集方針にそい、ルビの拗促音は小書

きました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

凱旋祭

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>